
冒険者かく語りき ~トレジャーハンター修行中~

小坂みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者かく語りき ～トレジャーハンター修行中～

【Nコード】

N8943Y

【作者名】

小坂みかん

【あらすじ】

玉藻&土鍋ご飯さんのWizardry Onlineのリプレイ小説「冒険者かく語りき」の外伝です。

キャラ設定の部分等で創作しているところはもちろんありますが、今のところ、小断含めほぼ完全リプレイです。

キャラクター間での会話内容や挙動については、あまり創作しておりません！

つまるるところ、物語仕立てのプレイ日記でございます。

それなのに、それとなくドラマが見え隠れする不思議。

想像というスパイスをふんだんにふりかけまくらなくても意外とオイシくなるのは、MMOの醍醐味ってやつなんでしょうね。

あ、完全創作する際は前書きのところに「創作です」と書きますね！

土鍋ご飯さんと同居している私。

PCが一台しかないため、私のハル君と土鍋ご飯さんのミーチャんやイナンナさんが一緒に冒険するのはいつになることやら……。

2

Wizardry Onlineはgame potさんの提供する基本プレイ料金無料のMMOです。

この作品はpixivでもお読み頂けます。

用語辞典 (最終更新日: 2011/11/28) (前書き)

このゲームをプレイしたことがない人のための用語辞典です。

リプレイ小説化するにあたってゲーム内の表記等と変えているものもあつたり、私の独自の解釈のものもあるので「これが全て正解」ではないです。

もちろん、読み飛ばしOKですし、本編の方でも説明を入れさせて頂いていますので「そんなの必要ねえよ!」という方は「回れ右」して2話目よりお楽しみください。

用語辞典 (最終更新日:2011/11/28)

【レベルについて】

冒険者には2つのレベルがある。

・冒険者レベル

肉体の成長度合いを表す。レベルが上がるとHPとMPが増える。力強さや素早さ、運などのパラメータは確実に上がるというわけではなく、上がらない事もあれば逆に下がるということもある。

・ソウルランク

魂の成長度合いを表す。ランクがあがると冒険者レベルの上限が解放されたり、挑戦可能なダンジョンが増えたり、更には装備出来るものの種類が増えたり装備品を強化したり出来るようになる。

【冒険者証】

冒険者レベルやソウルランク、あとの程度でレベルが上がるかなどの指標だけでなく、冒険者個人の属性や、冒険を通して獲得した称号、現在の自分の装備についてや「どんなものに自分は耐性を持っているか」なども確認出来てしまう優れ物。なんと、体調管理も行えるぞ！

【称号】

一定レベル何かをすると授けられるもの。冒険者としてのステータスの一部。種類は色々あるらしい。

【属性】 アライメント

何かしらの職業に就くにあたって必要となってくる「個人の人柄を表したもの」的なもの。3種類ある。

・秩序 (Lawful)

簡単に言うと「真性の良い人」。ただし、自分の正義を貫くタイプなので、必ずしも善人ではない。

・中立 (Neutral)

物事には白黒だけではなく灰色もあるという事を分かっている人。悪く言つと「どっちつかず」。ごくごく普通の人。

・混沌 (Chaos)

良くも悪くも個性的。単なる腹黒のドジっ子から真性の悪まで幅広い。でも、だからといって必ずしも悪人というわけではない。

【スキルツリー】

職業別に覚えられる技を系統立ててまとめたもの。ギルドから支給されている。冒険者レベルが上がるとスキルを覚えるためのポイントが与えられるので、このスキルツリーを見ながら「何を覚えようかなあ」と悩むのも冒険者の楽しみのひとつ。ちなみにポイントを取っておいて後で使うということも出来るので、覚えたい技が覚えられないようになるレベルになるまでポイントを貯めておくのもあり。

【種族について】

・エルフ

耳が長く、美男美女が多い。ナルシストでプライドも高い。体力は低い。向いている職業は魔法系や芸術系。

・ノーム

おっとりとした口調で信仰心も高い。力強さもそれなり。小柄。角が生えてて、耳が少しばかり尖り気味。角はやぎ角みたいな感じで、個体差がある。ちなみに、角を引っこ抜かれると死ぬらしく、大昔に人間に乱獲されたそうです…。

【職業について】

ファイター ・戦士

戦いの最前線に出て、剣や斧、槍などで戦う人。

・盗賊^{シーフ}

罾を解除したり、お宝の匂いを嗅ぎつけたり。必ずしも犯罪者というわけではなく、トレジャーハンターの意味合いの人が多い。

・僧侶^{プリースト}

支援や回復系の魔法が得意。…と、思いきや、戦士の次にブロッカーとして活躍する頑張り屋さんな職業。

【その他】

・ギルド

冒険者にお仕事（依頼・ミッション）を与えてくれる、ありがたいところ。たまに試供品なんかもくれる。

・パーティー

ダンジョンやミッションを効率よく攻略するために冒険者同士が一時的に仲間になった状態。

・ユニオン

パーティー活動などを通して気が合った仲間が集まって作った集団。同盟とか、労組みたいなもの。ユニオンに所属していると、今後何かいいことがあるかも…？

冒険開始から、初めての畏解除成功まで（前書き）

本日（2011/11/26）、初めて畏解除に成功致しました。あまりの嬉しさを記念して、土鍋ご飯さんに倣ってリプレイを書いてみました。キャラクター設定の部分はもちろん創作ですが、プレイ中の心情はほとんど素です。

冒険開始から、初めての罫解除成功まで

「男エルフで盗賊？何か、やつらしい！宝箱なんかはクールに軽々罫解除しちゃって、女の子には『君の瞳は宝石のように美しい』とか言っちゃって、お宝も女の子も選り取り見取りってわけ？」

「はん。馬鹿馬鹿しい。女なんかよりも、本物の宝石の方が百万倍も美しいね。俺はね、俺のようにうつつくしい宝石様にお目にかかりたいだけなの」

「うわ、出た。ナルシスト発言。あんた、そんなんじゃあ、いつまで経っても独り身よ？」

「うるせえな、放つとけよ」

ハルはかつて姉貴分とした、そんな会話を思い出しながらガツクリと肩を落とす、深いため息を吐いた。そして背中にたかる虫を払いのけながら急いで立ち上がると、安全な場所へと移動しながら荷物を取り、回復薬を煽るように飲み干した。

「ああ、くそ！また毒針食らっちゃったよ！ム力つくな！！」

思いがけずそう叫び、いまだ追ってくる虫へ八つ当たりのように薬瓶を投げつけると、彼は街へと戻るための梯子めがけて走り出したのだった。

街に戻つてくると、ハルは荷物の中を覗き込み、顔をしかめさせた。戦利品は僅かな回復薬と石と、雀の涙ほどの端金。あとは装備が出来るかどうか分からない靴がいくつかと杖だ。どうせ靴は自分の職業では装備出来ないもののはずだし、石はキラキラと綺麗に光り輝いてはいたが、所詮はただの石である。宝石にはほど遠い。この石を大量に集めると宝箱の鍵を作つて貰えるなどという噂も聞きはしたし、実際にそれらしい宝箱も目にしたのだが、自分の財布の中身を考えると銭に変えてしまった方が良さそうだった。彼は「靴と一緒に、石も売っちゃおう」と心の中でごちると、杖に目をやった。宝箱の畏解除に失敗して毒を受けつつも、何とか手にした杖だ。良いものであつて欲しい。ただ、この前石つぶてを食らいながら手にした杖は、ささくれだつてボロボロに朽ち果てた二束三文にもなるかどうかのものだった。今日手に入れた杖も同じように汚らしい。…いつまで見つめていても、金にはなってくれない。今度こそ、良いものでありますようにという思いを胸に、彼は道具屋へと歩き出した。

「ああ！やっぱり今回もシヨボかった！こんなんじゃない、いつまで経つても装備整えらんねえよ！！」

道具屋で靴と杖を鑑定してもらったのだが、やはり自分が装備出来ない靴と、この前と同じ杖だった。道具屋で売っている武器や装

備は、いまだに宿にすら泊った事がなければ酒場を利用した事も無い自分には到底出せない価格だった。以前、姉貴分が「露店販売を覗いてみなさいよ。結構安くていいものがあることがあるわよ」を言っていたが、この街に集まってきている冒険者は、もうかなりの手練となっっているのか、露店にも彼のレベルで装備出来るようなものは売っていない。「このままじゃあ、本当にいつまで経っても装備を整えられないから、もっと経験値も金も稼げる依頼を受けようにも受けられないし、レベルも上げられない」と彼がうなだれていると、タイミング良く郵便が届いた。姉貴分からの小包だった。

戦士をやっている姉貴分は良い仲間と巡り会ったようで、仲間達と着々と冒険者レベルを上げていた。そのため、どんどんと低レベルの装備が要らなくなるようで、姉貴分は装備が要らなくなる度に彼に合うサイズに手直しをして送りつけて来た。たまに「最初のダンジョンで盗賊が装備出来るモノ、ゲットするの大変でしょう?」と言って、わざわざ露店をチェックして見つけて来てくれもする。姉貴分に頼りきりなのは情けないと思いつつも、正直大変ありがたかった。ハルは装備中の「毒を受けにくくなる」という小汚い皮鎧を脱いで届いたばかりのローブを着込むと、再びダンジョンへと潜ったのだった。

姉貴分からのありがたい施しのおかげで防御力も上がり、ギルドから討伐を依頼されている盗賊団の下っ端も何とか苦勞することなく倒せるようになってきた。倒した敵の持ち物を物色してみると、

鎧を手に入れることが出来た。街に戻り鑑定をしてもらってみると、以前姉貴分からお下がりで貰ったものと同じ「毒を受けにくくなる」という皮鎧だった。既に持っている物ではあったが、自分で手に入れたということが何とも感慨深かった。

不用品を売り払った金が貯まり、ようやく剣だけではあるがギルドから配給される初級冒険者用の剣から卒業することが出来た。これで攻撃力も少しは上がる。ハルは心なしか顔をほころばせると、再びダンジョンへと戻っていった。

もう少し虫退治で経験値を稼ごうと思っていたにも関わらず、ダンジョンの入口付近でお目当ての虫に出会う事は滅多になかった。もう少し、奥に行きたい。そう思っていた矢先に姉貴分からまたもや小包が届いた。結構見た目の良い皮鎧と、暗器と呼ばれる、いわゆる「ナツクル」だった。暗器は両手に装備するため防御が出来ない分、身軽に動けるので攻撃の手数が増える。これなら「決戦場」と呼ばれる力試しの場もクリアして、ダンジョンの更に奥へと進めるようになるのでは。そうと決まれば、途中で放棄していた「決戦場へと続く道を拓くための仕掛けの攻略」を再開させよう。ハルはそう思い立つと、まだ押していない四つ目のボタンのある部屋へと向かった。

しかし、思うように行かない。ボタンのある部屋に辿り着く前に、盗賊頭に殺される。何度挑んでも殺される。初心者には神の加護が

あり確実に蘇生出来るとはいえ、死ぬというのはやはり気分のいいものではない。この前レベルが3になった時に盗賊業には重要な運の数值が一つ下がった。こんなにポコポコと死ぬのは、運がないかなのだらうか。そんなことを考えていると、ふとレベルが上がった時に授けられるポイントについて思い出した。新しく技を覚えたり、既に覚えている技を強化するにはこのポイントを消費する必要がある。もう少し高レベルになったら割り振ろうと取ってあったポイントを使って、何とか今抱えている問題をクリア出来はしないだらうか。そう思ってギルドから渡されていた「スキルツリー」なるものを広げて見てみると、既に覚えることが可能な技の一つに「ステルス」というものがあつた。何でも、一定時間姿をくらませた状態になれるらしい。

「何だよ、あるじゃん!!」

ハルは思わずその声を上げると、恥ずかしそうに頬をほのかに赤らめさせた。冒険者たる者、常に注意を払えと姉貴分が口癖のように言っていたのを思い出したのだ。彼はそそくさと「ステルス」を覚えると、スキルツリーを荷物にしまい込んで四つ目のボタンを攻略しに向かったのだつた。

何とか決戦場への道を拓き、その決戦場もクリアしてレベルが4

になった。ダンジョンの更に奥へと進めるようになって、盜賊団の一味の追剥ぎ男に遭遇するようになった。こいつを五人片付けると結構な経験値と金が貰える。虫も奥の方がよく湧いた。おかげ様で、レベル3から4へと上がる時よりも楽に5へと上がることが出来た。

レベルが5に上がってすぐのことだった。ダンジョン内をうろつろつとしていると特殊な鍵が施されているわけでもなさそうな未開封の宝箱を発見した。…今日こそは、宝箱の罫解除を成功させたい。そう思って宝箱の前にひざまづくと、追剥ぎ男に見つかった。

「宝箱！宝箱に集中させるよ！うっとおしい！！」

目の前の折角のお宝が他の冒険者に持って行かれるところを想像して苛々としながら追剥ぎ男を殴り倒すと、ハルはいそいそと宝箱の前へと戻った。この前はどんな罫か見定めは出来ていたものの、罫を解除出来たという手ごたえが低く、ままよとばかりに鍵を回してみたら案の定失敗した。その前はどんな罫か見定めている間に罫が作動してしまって失敗した。だから、慎重に、慎重に…。動悸が激しくなり、呼吸が荒くなるのを抑えながら見定めを続けていると、今までに感じた事もないような手ごたえが得られた。

（これなら、いけるか…？）

はやる気持ちを抑えつつ、ゆっくりと宝箱の鍵を回す。カチリという聞いたことのない音が鳴り響き、罫が作動することなく宝箱は開いたのだった。ぱっくりと開かれた宝箱をハルは束の間見つめる

と「開いたー！！」と叫びながら宝箱の中を覗き込んだ。

「うわ！うそ！開いた！罫が作動せずに開いたよ！！なんか、ようやくシーフを名乗れる気がするよ！うっわー！五つも物が入ってる！すっげー！！！」

彼は大はしゃぎしながらいそいそと宝箱の中身を荷物へとしまい込むと、あともう少しでミッション達成となる追剥ぎ男の討伐と虫退治を手早く終わらせ、意気揚々と街へと帰っていった。

ルルン気分が街へと戻ってきた彼を待っていたのは幸福な気持ちではなく、落胆だった。鑑定の結果、宝箱に入っていたのは例の毒に強い小汚い皮鎧と、壊れた剣と盾、装備品に装着させると体力が微量に増えるという不思議な石、それから毒消しの薬だった。体力増加の不思議な石は試供品でギルドから貰える物の方が質がいい。だから正直、売りとはした方が嬉しい気分になれる。まあ、冒険なんてそんなもの。そのうち挑戦できるダンジョンも増えて、もっといいものも手に入るさと肩を落としていた彼は姉貴分からの手紙を読んで更に機嫌が悪くなった。

冒険者には冒険者としてのレベルの他に魂の成長度合いを表した「ソウルランク」というものがある。手紙によると、姉貴分は既にソウルランクが4になったとのことだった。レベルがどんどん引き離されるのはまだいいとして。癪にさわるのは「カイ」だかという仲間の戦士だ。どうやら姉貴分は蘇生に失敗して灰になった際にこの戦士に助けられ、それ以来、彼のことが気になっているらしい。

今までは自分を心配してくれ気遣ってくれる内容だったのだが、今となつては大半がカイがどうしただのこうしただのという内容で埋められた手紙を思わずクシャリと握りつぶすと「だから、カイって誰だよ！」とハルは叫んだ。

一番盗みたかったアメジストを、見知らぬ戦士に奪われかけている。冒険者としての道のりはまだ遠く長い盗賊の目の前に、大きな難問がまた一つ立ち塞がったのだった。

冒険開始から、初めての畏解除成功まで（後書き）

…最近、土鍋ご飯さんが目の前で「カイさんが」「カイさんが」言う度に、本当にイラツと来るようになってきました。ちくしょう、出来ることなら、人狩りしてやりたい…。でも、私は良い子なので、犯罪には手を染めないんだもん！ふーんだ！！はあ、カイさんなんて気にしないで、自分のペースでゆっくりレベル上げようっとな…。

小晰 数値とユニオン（前書き）

もう寝ようと思い、土鍋ご飯さんにPCを明け渡したら、ハル君的には事件と呼べるものが起こりました。なんか、寝付けなくなってしまうので、何となく投稿します。ちなみに、数値関連についてはネタバレを含みますので、まだ最初のダンジョンをクリアしていない人は「回れ右」をお願い致します。

小哘 数值とユニオン

ハルは街に戻つてくると、何とはなしに財布にしまつてあつた冒険者証を眺め、思わず「え!？」と声を上げた。レベル4から5に上がるのは案外楽だつたのにも関わらず、5から6に上がるためには現在蓄積されている経験値の倍は稼がないといけないということが冒険者証の指標には表示されていた。

「えー…うそ、あと2200つて、追剥ぎ男で換算したら22回分? ダンジョンうろつろしてたらアツと言う間に貯まるかなあ?」

そのように呟きつつ眉間に皺を寄せながら冒険者証と睨めっこしていると、彼はある数值が変動していることに気がついた。自己の属性を表す表示のところの「秩序」の項目が若干ながら増えていたのである。

属性というのは何かしらの職業に就く際などにも関係する、いわゆる自己の「人柄」のようなもので、三種類に分けられる。「秩序」と「中立」と「混沌」だ。秩序は分かりやすく言うと「真性のイイ人」で、中立は「世の中には白黒だけではなく、灰色というものも存在するということが分かつている」という、まあどちらかというところと普通の人、そして混沌は「良くも悪くも個性的」とでも言おうか。ちなみにハルの属性は中立で、姉貴分は混沌だ。姉貴分とよく行動を共にしているというリアというプリーストも姉貴分と同じく混沌属性だと聞いたことがある。姉貴分から聞いた限りの彼女はともおつちよこちよいで、ほぼ全ての罫に引つ掛かり、ドジを踏んだのを可愛らしい笑顔で誤魔化す割には腹黒いらしい。姉貴分もしつ

かりしているようでかなり抜けているところがあるのを思い出したハルは「混沌属性って、もしかしてドジの別名？」と首を傾げた。

そのようなわけで各々「属性」というものを持ち、それも冒険者レベルと一緒に記載されているのだが、ハルの冒険者証には今まで0と記載されていた「秩序」の欄が10となっていたのだ。そして100だったはずの「中立」も110に増えている。

(俺、何かしたっけなあ…?)

宙に視線を投げながら今までの冒険を思い返してみたハルは、あ
ることを思い出した。ダンジョンの中で二度ほど、ギルド以外の依
頼を受けた事があったのだ。そして、その依頼を達成した際に依頼
主に質問をされ、何とはなしに返事をしたことがあった。大切に
していた人形を落としてしまったという男の代わりに人形を探してき
た時には、その人形が本当に大切にされていて、彼にとっては珠玉
の宝石のようなだろうというのが伝わってきた。だから「その人
形、あなたに愛されてるな」と笑って人形を手渡してやった。また、
暗闇でペンダントを落としたという男の代わりにペンダントを探し
てきた時には、「暗闇の方が落ち着くよね？」と聞かれて、「日向も
暗闇も好きだけど」と答えた。暗闇にはここそこに危険も潜んでは
いるが、ひっそりとお宝が眠っていることもある。そして陽の下で
は、姉貴分が愛する農作物が煌めき輝いている。だから暗闇も日向
も、本当にどちらも好きだったから、そう答えた。どちらの回答が
どのように数値の変動をもたらしたのかは分からなかったが、その
くらいしか変動の理由は思い当たらなかった。まあ別に、このくら
いの変動じゃあ何かに影響が出るといってもないしと思いつながら
冒険者証を財布にしまうと、ちょうどまた姉貴分からの郵便が届い

た。今日は小包ではなく、手紙だけだった。

手紙によると、姉貴分はパーティーの仲間と「ユニオン」と呼ばれるものを作ったらしい。パーティーとはまた違う、ギルドの依頼を効率よく攻略するために気の合う仲間が集まった「同盟」のようなものだという。ユニオンを作るにあたって登録料として三万という大金が必要になるそうなのだが、姉貴分はうっかりとんでもない名前で登録を行ってしまい、慌てて登録破棄したということだった。うっかりミスで大金を失いうなだれていると、いつものメンバーがやってきて一緒に資金調達をし直してくれたそう、なんとか無事にユニオンを立ち上げることが出来たそう。ユニオン名は「アザルス」の風」というそう。この大陸を股にかけ、風のようにさすらい、冒険者として名を上げようという彼女達にはぴったりの名前だった。「よかつたら、ハルも入る？」と誘ってくれたのは嬉しかったのだが、ユニオンに入るには直接ユニオンのメンバーと面会しなければならぬらしい。姉貴分とは常にすれ違いで手紙でしかやりとりが出来ず、姉貴分の仲間の顔も知らないハルは大いに悩んだ。そんな状態では入るうにも、入れないではないか。どうやって姉貴分と顔を合わせようかと思案しながら手紙を読み進めていた彼は、思わず顔をしかめて手紙をクシャリと握りしめた。そもそも、ユニオンを作ったのは「今日もカイと会えるかと思ったら、彼、一向に街に顔を出さなくて。ユニオンを作っておけば専用の掲示板も使えるから、『いつなら一緒にダンジョンに行けるよ』っていうやり取りもしやすくなるし」という理由らしかった。

「だから、カイって、誰なんだよ!!!」

思わずハルはそう叫ぶと、必死に辺りを見回した。どれだ。どれ

がカイってやつだ。この街に身を寄せているのは間違いないから、もしかしたらすぐ近くにいてもしれない。レベル的に十中八九返り討ちになることは間違いないが、それでも一発殴ってやりたい。

見知らぬ戦士を探す事を諦めたハルは不機嫌そうに鼻からフンと強く息を吐くと、姉貴分からの手紙を荒々しく荷物へと突っ込み、便箋を取り出した。そして「ユニオンに勧誘してくれるのはありがたいけど、それなら顔出せ。馬鹿角」とだけ殴り書くと、封筒に彼女がよく利用しているという宿屋の住所を書き、郵便屋に叩きつけるように手渡した。

小哘 数值とユニオン（後書き）

…というわけで、ユニオンに誘われました。ちなみに、「ユニオン作る！」と言いだした時に土鍋ご飯さんが言っていた「ユニオンを作る理由」ですが、本当に本分の通りのことを言ってやがりました。どんだけ「カイさん」なんだよ。あ、加入するためにも、ネカフエに行くしかないのかしらん…。

小嘶その2 リリアとの遭遇とユニオン加入（前書き）

おかげ様で無事にユニオンに加入出来ました。リリアさんを見付けられて本当によかった。ネカフエる手間が省けました。ありがとう！

小嘶その2 リリアとの遭遇とユニオン加入

たまには露店でも覗いてみるかとハルが街中をぶらついていると、ブリーストのノーム娘が露店を開いていた。聞き覚えのあるユニオン名のネームプレートを付けていたのもしやと思い声をかけてみると、彼女が噂の「ドジっ子リリア」だった。いつも姉貴分がお世話になっていきますと声をかけると、向こうもこちらのことを話で聞いていたのか、明るい笑顔で返事を返してくれた。

何とはなしにそのまま彼女の隣に腰を落ち着かせて世間話をしていたのだが、姉貴分から聞いていたのとは随分と違って、リリアはとても優しく素敵な女性だった。：ただ、時折「ウヒ」などと裏に何かを含んでいるような怪しい笑い方をする不思議な人でもあった。やはり、混沌属性というのはとても個性的のようだ。彼女は本当に優しく、「よかったらレベル上げ、手伝いましょうか？」と言ってくれた。あまりにもレベルが離れ過ぎているので付き合わせしてしまうのも申し訳ないという思いと、もう少し自力で頑張りたいという思いから「気持ちだけで嬉しいよ。気遣い、本当にありがとう」と返した。いつか姉貴分と三人でどこかに冒険に行けたらきつと楽しいだろうと考えていると、彼女がクスクスと笑いながら「やだ、何見てるんです？惚れちゃ駄目よ？」と言ってきた。

「惚れないよ！」

「えー」

「えー…って何ぞ」

「いいえ？」

本当に彼女は面白い人で、もっと仲良くなりたいと思っていたら向こうの方から「友達になろう」と声をかけて来てくれた。ちょうど自分も同じことを言おうとしていただけに、心なしかドキツとした。

彼女はユニオンの方にも誘ってくれ、慣れない手つきで紹介状を作成してくれた。

「はい、これでウチのユニオンのメンバーですよ。ようこそ！」

「あ、ありがとうございます！本当に、いつも姉貴分がお世話になっていきます」

「いえいえー、お世話してますー」

「そこは普通『こちらこそ、お世話になってます』じゃないの？」

笑いながらリアにそう返すと、彼女はクスクスと笑いだした。

…何だよ、姉貴分から聞いていたのとは全然違って、本当に楽しくていい人じゃないか。そのままつらつらとまた他愛のない会話をし、冒険者がよく陥る「金欠病」から「良い装備を手に入れるには」というような話になった。宝箱さえ開けられたら、レア物も結構手に入るからお財布も暖かくなるのにと頬を膨らめますリアを眺めていて、ふと、先日の冒険でリアの宝箱の解錠率がパーフェクトだったという話を聞いていたことを思い出した。

「ちゃんと宝箱、開けられてるじゃん。俺なんて、昨日ようやく初めて解錠に成功した駄目シーフだよ」

「ふふ、神様のご加護ですよー」

胸を張って得意げに笑うリリアは「レベルが上がればそれだけ冒険もし易くなるし、特殊任務を受けたらどう？」とアドバイスをしてくれた。期間限定でしか受けられない特殊な任務は金も経験値もオイシイらしい。彼女は折角開いていた露店を畳むと「こっちへ来て」と言って特殊任務を受注できる場所へと案内してくれた。任務の内容を見てみると、今の自分にはかなり骨が折れそうな内容だった。とりあえず、もう少しレベルを上げてから挑んでみようか。そんなことを考えていると、隣にいたリリアがこちらを見上げて「頑張ってね!」と笑いかけてくれた。見上げられて初めて、彼女がとても小柄だということに気がついた。

「今並んでみて気付いたんだけど、ノームってすごく小柄」

「そうなんですー」

「ハグしたら、ジャストにスッポリ腕の中に収まりそう」

ただ単に「小柄である」ということのご感想としてそう言ったのに、彼女は「きゃーセクハラ!」と言いだした。慌てて「え、何で!？」とハルが声を上げると、彼女はクスクスと笑うばかりだった。

「可愛いねって話だよ!？」

「あら」

「何」

「いえ、レベル上げ、頑張ってねー」

笑い続ける彼女が本当に可愛らしくて。不覚にも、思わず「本当にハグしたい」と思ってしまった。正直、姉貴分よりも可愛げがある。どうして姉貴分はこんな素敵な人のことを「腹黒」だと言うのだろうか?こっちの気も知らないで「カイさんが」「カイさんが」と言ってくるお前の方がよっぽど鬼畜だよ。

ハルはリアに別れを告げると、いつもの下水道へと戻っていった。

いつかきつと、姉貴分や彼女と冒険に出たいから。とりあえず今日も追剥ぎ男退治を頑張ろう。

小嘶その2 リリアとの遭遇とユニオン加入（後書き）

ちなみに、彼女との会話文はほとんど原文ママです。ハル君が本文内で彼女に対して思ったことも結構リアル。ほ…本当にハグしたいって思っちゃったんだよね…。だって、モーションとか巧みに使って、本当に可愛らしく笑うんだもん。なんたる、感情移入し過ぎ？これ、ロストしたら立ち直れなくなりそうで怖いわ。

えっと、とりあえず、私は危ない人ではないし、ノーマルだし、ちゃんと三次元に土鍋ご飯さんという伴侶がいるということを念押ししておきますねっ!？

レベル6になるまで（前書き）

次のレベルで成長限界なので、早く下水道をクリアしなさいです。
頑張るぞー！！

レベル6になるまで

リリアにユニオンへ加入するための手続きをしてもらった後、ハルは彼女達に追い付きたいと意気込んで下水道へと戻っていった。今日は運に恵まれていいのか、いつもよりも宝箱に遭遇することが多かった。動悸がするのを抑えつつ罨の見定めを行っている途中で、彼は強い衝撃と視界が白むのを感じた。ふと気がつくとな彼は静寂の世界に包まれており、足元には自分の死体が転がっていた。…罨の爆弾が見定め途中で爆発したのである。

「え、うっそ！マジかよ！！」

彼は慌てて蘇生の行える女神像へと走った。罨解除に失敗した宝箱とはいえ、中には何かしらが入っている。命を失ってまで開けた宝箱の中身を他のヤツに持って行かれては堪ったものではない。彼は生き返ると、今度は先ほど自分が死んだ場所へと急いで引き返した。

「宝箱！宝箱の中身は！？………よかった！あるよ！！」

ホッと胸を撫で下ろし、急いで中身を荷物へとしまい込むと追剥ぎ男がやってきた。何度か追剥ぎ男と戦っていると、再び宝箱に遭遇した。今度こそ、慎重に、慎重に。そう思いつつハルは見定めを行い、そして絶叫し、走りだした。

「はあ！？マジぶざけんな！！また爆発するってどういことだよ！！！！」

なんと二度目の宝箱も罫解除失敗で、またもや死んでしまったのである。先ほどと同じように急いで生き返って戻り宝箱の中身が無事であることに胸を撫で下ろし、三度目の正直とばかりに挑んだ宝箱も途中で罫が作動し、石つぶてを食らってしまった。：昨日の解除成功はまぐれだったのだろうか？うなだれつつも四度目の宝箱に挑む中、ハルはあることに気付いて見定めのための技を使い分けるタイミングや順序を変えてみた。すると、どうであろう。すんなりと罫解除に成功したのだった。そしてその後も二つ宝箱を開けたのだが、そのどちらも罫解除に成功出来た。

（やっぱり、焦ったら駄目だな。落ち着けば、ちゃんと出来るんじゃない、俺！）

自分の成長に喜びつつ宝箱の中身をしまっていると、脚甲という今まで手にした事のない装備品を得ることが出来た。もしかして、自分の装備出来るものか？そう期待しつつ街に戻り鑑定を依頼してみると、なんと装備可能なものだった。しかも、脚甲装備はギルドから支給されていた初心者用の装備品をいまだに使用していたので、今回手に入れた物の方が防御力が高い。

（は…初めて、自分で「今身に着けている物以上の装備品」を手に入れた…）

ハルは心の中でそう呟くと、目頭が若干熱くなるのを感じたのだ。
った。

再びダンジョンと街との往復を繰り返していると、財布の中の冒険者証が何やら音を立てたような気がした。追剥ぎ男の討伐依頼を達成し終えたということをダンジョン内にいるギルドの職員に報告しに行った際に、再び依頼をこなしに戻る前にふと立ち止まって「さっきの音はなんだっただろう？」と冒険者証を取り出してみた。すると、今までの行いの中の何かが一定レベルをクリアしたようである。獲得称号の欄に一つ称号が増えていたようだった。何が増えたのだろうか？と首を捻ってしげしげと冒険者証を眺めていた彼は思わず「え！？」と声を上げた。増えていた称号は「小金持ちの冒険者」だった。その称号は、いつの間にか冒険中に稼いだ銭の累計が一定数値を超えていたということを表していた。赤貧にあえいでいた彼にとって、それは心なしか心躍るものだった。

（どうしよう。貯めておいた金を使って、装備を新しくしようか。でも、この先レベルが上がってきたら、露店で中古を買うか、ダンジョン内で自力でゲットするかするしかなくなってくるんだもん。今からあまり、使いたくはねえなあ…）

目を白黒とさせながら思索していた彼は、何かを思いつき「そうだ！」と声を上げた。

「折角だから、宿屋に泊まってみよう！そのくらいの贅沢は許されるよな！！」

ちょうど体力も減っていて幾分か疲れている気もするしということと、ハルは次に街に戻った際に宿屋へと足を運んだ。姉貴分が口癖のように「いつかロイヤルスイートに泊ってみたい」と言っていたのを思い出して宿泊費用を見ると、なんと3000ゴールドもした。ただ、高費用な分やはり至れり尽くせりのようで、体力・魔力が完全回復する上に、体調がどのくらい優れているかを最高200%という数値で表したものが冒険者証に表示されるのだが、それが160%まで回復できるらしい。そんなに疲労回復の効果があるなら、確かにいつかは泊ってみたいと思いつつ、他の部屋の料金表を見ていたハルはあるものに目ざとく気がついた。料金無料の「馬小屋」の上に、ソウルランク2までの冒険者限定ルームの案内が記載されていたのである。そして、思わず驚きの声を上げてしまったのだった。

「え、これ、間違いじゃなくて？ロイヤルスイートとほとんど同じ効果なのに、1000ゴールドで本当にいいんですか！？」

「いいコンディションの方が戦闘も楽になるから、レベル上げも苦じゃなくなるだろう？ギルドとしても新米冒険者には早く若葉マークを卒業してもらいたいんだとさ。お兄さん、1000くらいならも

う気軽に払えるくらいにはなってるなら、利用して損はないと思うよ?。」

「いやいや、損どころか！泊ります、泊ります！！」

たった100ゴールドさえ払えば体力・魔力が完全回復する上に体調が150%まで回復出来るなら、そりゃ喜んで払います。払わせて頂きますとも。追剥ぎ男のミッションは達成すると250ゴールド貰えるから、そのくらいだったら財布も痛まない。本当にありがたい。ハルは満面の笑みでしばらくぶりの布団に寝転ぶと、久々に泥のように眠ったのだった。

体調がいいと、やはり戦闘中のキレもいい気がした。これなら、レベル6もすぐさまな気がする。ハルは勢い込んで追剥ぎ男を追いかけ回した。そしてレベル6に上がるために必要な経験値を稼ぐと、街に戻って宿に泊った。

目が覚めて、チェックアウトの際に女将さんが「レベルアップおめでとう。次のレベルまではあこのくらいですよ」と教えてくれた。そして、レベルが上がったことによつてどのような数値が変動したかを確かめるために、動悸がするのを抑えつつ冒険者証を取り出した彼は「はあ!？」と怒りにまかせて絶叫し、目の前の女将を驚かせた。

「なんで、また運が下がるんだよ！運のないシーフって、どんなだよ！！」

「お兄さん、きっと次は良いことがあるから、気にしなさんな」

「いや、良いことって！運が下がったのに！？」

まあ、冒険なんて、そんなもの。ハルは諦めのため息を吐くと、女将に「また来ます」と挨拶して宿屋を後にしたのだった。

レベル6になるまで（後書き）

……… 2回爆弾で死んだ時と、SR2までの冒険者限定部屋の効果を見た際と、そしてLUKがまた1下がった時はリアルに叫びました…。

小断その3 カイとのプチ遭遇（前書き）

レベル6になるちょっと前に、とうとうカイさんとチャット上でですが遭遇致しました。

後の方で、結局カイさんと顔を合わせたかのようなシーンが出てきますが、その時には既に私はPCを土鍋ご飯さんに引き渡していたので、私とカイさんとの遭遇は本当に前半のチャットで会話したのみです。

いつか、お会いした（キャラクターを並ばせた）状態でお話してみたいです。

とりあえず、チャットについては専用の通信機器があつて、インカムを付けてやり取りしているというような扱いとさせていただきます。

この世界に機械があるかどうかは分からないがな…！

小斬その3 カイとのプチ遭遇

もう少しでレベル6になると勢い込みハルが街と下水道を往復している、ユニオン専用の通信機器が音を立てた。誰が話しているのだろうと通信機を耳に装着しながら道具屋や鍛冶屋の前をうろろるとしている、男の声で「こんばんはー」と聞こえてきた。別の男が「あ、カイさん、初めまして」と挨拶しているのが聞こえ、ハルも思わず「初めまして。よろしくお願いします」と礼儀正しく挨拶をした。こいつが例の戦士か：などという思いよりも先に「あ、ちゃんと挨拶しなきゃ！」ということのほう我真つ先に脳裏をよぎった結果だった。カイともう一人のユニオン員、そしてリアが盛り上がっているのに耳を傾けていると、カイが「ハルさんは？」と尋ねてきた。彼らが先ほどまで「ここに行こうよ」と盛り上がっていたダンジョンは自分のレベルではもちろん行くことが出来ない。ハルは折角誘ってくれたのに申し訳ないと思いつつ「まだ、下水から出れないんです」と口を開いた。

「え、ソロでやってるの？」

「はい。冒険に慣れたいので、自分のペースでゆったりまったりと「なるほど」。ハルさんとも、一緒に行きたかったなあ」

「ありがとうございます。下水をクリアしたら、是非一緒に緒させて下さい」

「はい」

顔を合わせての会話ではなかったが、カイがとても良い人そうであるということを感じることは出来た。少し釈然としない部分もあるが、あの馬鹿角が吊り橋効果というだけで気になっているというわけでもなさそうだというのが分かり、心なしかホツとした。

再びユニオン員達の会話に耳を傾けていると、リアアとカイが連れだって結構なレベルのダンジョンに行こうかという話をしていた。今日はたまたま姉貴分がすぐ近くにいたハルが「だったら、姉貴分を呼んで来ましようか？」と彼らに声をかけると、急にカイが「だまされたー！ー！」と叫び出した。あまりの声の大きさに、顔をしかめて耳に着けていた機械を離しつつ「騙された？」とハルが返すと、カイは「あ、ごめん、こっちの話」と慌てた声を出した。：なんか、この人も結構面白可笑しいな。あの馬鹿角に、実はぴつたりなんじゃないか？そう思いつつ「じゃあ、あいつをそちらに行かせますから」と返事を返し、通信機未装着でまったりとしていた姉貴分に「カイさん達が呼んでるよ」と声をかけた。

姉貴分にくつついて、彼らの待ち合わせの場所へとやってくると、リアアが素手でパンチを中空に繰り出していた。姉貴分はいつも攻撃の際に「ほい！」という少々間抜けな声を出しながら斧を振る。それはもう「お前、斧じゃなくて、もう愛用のクワで戦えば？」と言いたくなるような感じなのだが。それとは対照的に、リアアはとても可愛らしい鈴の音のような声でパンチを繰り出していた。どう

して同じノームなのにここまで差があるのだろうか。あまりの可愛らしさに思わず「リリアさん、可愛い」と呟くと、隣にいた姉貴分が顔をニヤつかせた。

「ねえ、リリア。今、ハルがね、リリアのこと可愛いってニヤニ…」

「ニヤニヤはしてねえだろ!？」

慌てて姉貴分を小突いて口止めすると、姉貴分は「なんで私がはたかれなきゃいけないのよ…」と頬を膨らませた。そのやり取りを聞いていたカイが「また嫉妬を生む発言を…」を苦笑していたのだが、誰が誰に嫉妬するのだろうか?とハルは首を傾げさせた。それを見ていたリリアがクスクスと笑った。

彼らは本当に面白くて良い人達だ。一緒にいて、こんなにも楽しい気分になれるとは。彼らに出会えてよかったと思う。そして早く、そんな彼らと一緒にダンジョンに潜れるようになりたい。ダンジョンへと向かっていく彼らの背中を見送ると、ハルも思いを新たに下水へと戻って行ったのだった。

小嘶その3 カイトのプチ遭遇（後書き）

どうやらカイさんは私が「私をログアウトさせて、姉貴分へと変わりますでしょうか？」と声かけをした際に、ハル君の中の人が私ではなく土鍋ご飯さんだと勘違いした模様です。

あと、姉貴分が彼らと合流した際にハル君もそこにいたような感じで書きましたが、前書きにも記載しました通り、実際にはおりません。自宅からのインだったため。ただ、チャット上と、隣にいた土鍋ご飯さんとのリアルな会話にて本当にこんな感じの内容の会話してました。そして、土鍋を殴りつけたのも事実です。わざわざ報告するなよ、恥ずかしい。

でも、同じ種族なのに何パターンか声があるんですねえ。知らなかった。キャラクターエディットの時に声まではたしか聞けなかったはずなので、ソロでやってると気付かないですよ、これ。

ソウルランク2になるまで（前書き）

2011/11/28 ソウルランクがようやく2になりました。
今回はかなりネタバレを含みますので、まだ下水をクリアしていない人は「回れ右」をお願いします。

ソウルランク2になるまで

レベルも6になったことだし、そろそろもう少し奥に進んでみようかということ、ハルは以前ペンダントを探すためにうろついていた場所よりも先に進むことにした。いつも追剥ぎ男狩りを行っている場所にある扉を開け、奥へ奥へと進んで行くと図体のデカイ敵と遭遇した。狂気に見染められ、血に飢えた木こりだった。以前、ここを通り抜ける際にハルはこいつに殺された事があった。あの時は力の差が激し過ぎてなぶり殺しもいいところで、どうしてもダンジョンの偵察を行いたかった彼はステルスを使用して木こりの背後を幾度となく駆け抜けたものだった。今度は勝てるだろうか？彼は恐る恐る木こりの背後に近付き渾身の一撃を食らわすと、そこはかない手ごたえを感じた。…これなら、倒せる！自信が湧いてくる力も湧いてくるような気がして、ハルはそのまま一気にたたみ掛け、狂気の木こりを打ち倒した。心なしか不安で揺らいでいたダンジョンの奥へと進む決心が固まった瞬間だった。

奥へと進んでみると、何か装置が隠されていてそんな窪みを見つけて手を差し入れてみた。すると、ただ手がすすけて汚れただけだった。この先にはこの間決戦場へと行くために攻略した仕掛けのようなものは、もう何もないのだろうか？そう思っただけを進めると、案の定それらしいものはあった。これは、討伐依頼のあった盗賊団のボスが潜む場所へと続く道を拓くためのものなのだろうか？それとも、また決戦場があるのだろうか？とりあえず、その場にあったアイテムを失敬し、他にも何かないか探りながら歩を進めているとやはり同じような石の台を見つけることが出来た。先ほどの台に置かれていたアイテムとは別のものが、そこには鎮座していた。それも失敬して更に奥へと進むと、ここに至るまでに失敬した二つのアイテムを詰め込めるような装置を発見した。以前決戦場へと進む道

を拓いた際に作動させた装置と見た目が一緒だった。ただ、この装置には説明書のようなものが取り付けられており、それを眺めながらハルは眉間に皺を寄せた。

「はあ？虫取り？ホウ酸団子とか、そんなのの機械版かあ？」

とりあえず起動させてみようアイテムを嵌めこみ装置を起動させると、案の定決戦場へと飛ばされたのだが。

「き、ききき、気持ちわりい…！！」

辺り一帯虫、虫、虫…。今までに見た事もない量の虫が湧いていて、思わずハルは呻いた。大量の虫がこちらめがけて群がってくるのは、本当に気持ちが悪かった。ひいひいと嫌悪の叫びを上げながら虫を蹴散らすと、更に奥へと進むための道が拓かれた。

奥へと進んでみると、下水道が広がっていた。今まで「下水道」という名前のダンジョンなのに、一体どこに下水道があるのだろうか？と思っていたのだが、ようやくその「下水道」へと到達できたのだ。奥へ奥へと進んでみると、今まで見た事もないような畏がここ

そこに仕掛けられていた。それらを掻い潜りつつ、とりあえず最奥を目指してみる。その途中で何やら怪しい窪みを見つけた。手を差し入れてみると、死者の紋章が刻まれた鍵を手に入れることが出来た。一緒にメッセージも見付かったのだが、そこには「彼女は生きている」と書かれていた。死者が生を語るとは、何とも奥深い。それとも、このメッセージには文字面通りの意味とは別の何かが内に秘められているのだろうか？

手にした鍵を荷物へとしまい込んで更に奥へと進むと、「この先に盗賊団がいます」という注意書きのなされた装置を発見した。ここがどうやら、ギルドからの依頼で討伐を行わなくてはいけない盗賊団の本拠地らしかった。ただ、その場所へと行くには装置を作動させなくてはならないらしく、その装置というのもネジが抜かれて使えなくなっていた。

「ていうか、この広い下水道の中から三つもネジを探せって、とんだ嫌がらせだな…」

そう呟きながら来た道を引き返しつつ、ハルは「じゃあ、中にいる盗賊団達はどうやって出入りしてるのだろう？閉じ込められたっきりでは飢え死にするだろうから、こんな依頼も発生しないだろうし」と首を傾げさせた。

下水道へと戻り、ガラクタの山を探していると紫色の瘴気を纏った魔物に遭遇した。腕に覚えがないものは戦わない方がいいということを知っていたが、確かに、実際に目にしてみるとただならぬ寒気と嫌悪感しか感じなかった。もしかしたらこの先にガラクタの山があるかもしれない。ステルスを使って通りぬけようかと考えて

いると、件の魔物がこちらに気付いたようだった。このまま何事もなく去って行ってくれとハルが心の中で祈っていると、ヤツがこちらめがけて走り出した。

(やばい、確実に殺される…！)

血の気がサーツと引いて行くのを感じながら、ハルは慌てて魔物に背を向け走り出したのだが、あまりの恐怖で足がもつれるのか、走る速度をあげることが出来なかった。それでも何とか魔物を振り切り、ヤツのいた場所を避けて探索を続けたのだが、先に見付けていたガラクタの山以外にそれらしいものは見付けられなかった。やはり、あの魔物のいた先に一つあるようだ。胃の腑が重くなるのを感じながら例の場所へと戻ると、彼は早速ステルスを使用して魔物の背後を駆け抜けた。ハルはこのスキルを覚えておいて本当によかったと心底思った。戦士の姉貴分がレベル12に上がった際にこの魔物に挑んでみたそうなのだが、防御力を上げに上げ、更にしつかりと防御を行っていたにも関わらず、盾が盾としての機能をするこ^となく瞬殺されたと言っていた。自分の倍ものレベルで、しかも戦士職の者が紙くず同然に散るほどの強さなのだ。触れたくないどころか、目にしたくもなかった。本当に怖すぎる。

あまりの恐怖で目眩を起こしつつ、ステルスの効果が切れる前にヤツの背後を通り抜けて辺りを見回してみると、やはりガラクタの山はあった。これでネジが二つ揃った。だがしかし、もう一つのネジは一体どこにあるのだろうか？散々見て回ったが、それらしいものはこれ以上、もないし。とりあえず一旦下水の入口へと戻ってみよう。そう思いながら歩を進めていると、やはり入口付近にガラクタの山はあった。下水の奥へと進む際に、陸橋のようにせり上が

った細い道を通って奥に進んでいたため、気付かなかった。最初からこちらを通っていればよかったな。ネジを拾い上げ、空いた手で後頭部をわしわしと掻きながら溜息を一つ吐くと、ハルは再び下水の奥へと戻って行ったのだった。

装置の修理も行ったことだし、これでアジトに踏み込むことも可能となった。だがしかし、今の自分のレベルで、果たして一人で討伐出来るだろうか？誰かとパーティーを組んだ方がいいだろうか？ハルは悩みながら、ダンジョンの入口付近へと繋がる穴を見上げた。あの穴から入口付近へと戻るのは容易だが、再びここまでやってくるのは少々骨が折れる。まだ神の加護が効いていて死んでも確実に蘇生出来る事だし、一か八か試してみようか。彼は意を決すると、装置を作動させてアジトへと踏み込んだのだった。

暗器を装着し、ゆっくりゆっくり奥へと足を進めると、盗賊団の一味の数名がこちらに気付いて襲いかかって来た。可能な限り攻撃を避けつつ応戦していると、意外とあっさり三人倒す事が出来た。回復薬を飲み、他に敵はいないかと奥に進んでみると、自分と同じくらいの背丈の男が一人いた。そいつとやりあっていると、視界にちらりと何やら巨大なものが映り込んだ。応戦の手を緩めずに視線だけ動かしてみると、身体を少々仰け反らせて見上げなければ顔が見えない程の背丈の男がそこにいた。

(こんなの、一人で倒せるのか：！？)

やはり誰かしらとパーティーを組んだ方がよかったかと少々後悔の色を滲ませながら敵から距離を取り、回復薬を煽るように飲み干して瓶を投げ捨てると、ハルは鬨の声を上げて大男に突っ込んだ。

最悪死亡するかと思っていたのだが、意外とすんなり打ち倒す事が出来た。他にも敵はいないかと辺りを見回してみたものの、今倒した男二人が最後の敵のようだった。クエストを達成し、下水を一通りは制覇したという実感が持てないまま、ハルは入口付近へと繋がる穴を飛び降りて、下水を後にしたのだった。

街へと戻り、ギルドへ報告を済ませると次の依頼を受けるべく「魔法省へ行け」と言われた。「正直、あんたにクリア出来るとは思わなかったよ」と言いつつも冒険者として成長した自分を嬉しそうに眺めるギルド員から褒美と魔法省への紹介状を受け取ると、ハルは早速魔法省へと行ってみることにした。

ギルドを出たところで、不思議な女と遭遇した。どうやら、自分と同じエルフ族のようだった。彼女は「あなたに是非ソウルについて話したいことがあるから、どうか寺院を尋ねて来て欲しい」と言ってきた。もしかして、ソウルランクが上がる時がとうとう自分にもやって来たということなのだろうか？魔法省も気になったのだが、

この女の言葉も気になったハルは、先に寺院へ行くことにした。

よくおいで下さいましたと歓迎の言葉を述べた女は、ソウルについてつらつらと説明してくれた。そして「あなたは既に次のソウルランクへと上がるための経験を積まれていますね」と微笑んだ。女が言うには冒険者レベルを7よりも上に上げるにはソウルランクを上げる必要があるらしい。だったら、レベルが7になるまで待とうか？でも、ソウルランクが上がれば装備可能なものが増えることだし。思い悩んだ末に、ハルはソウルランクを上げてもらうための儀式を受けることにした。

「おめでとつございます。これであなたは、ソウルランクが2になりましたよ」

祝福の言葉を述べた女がクスクスと笑いだしたので、どうしたのだらうとハルが首を傾げさせると、彼女は彼の頬に触れながら「神の御加護があるといいですね」と微笑んだ。彼が驚いて身を後ろへと引くと、彼女はジェスチュアで彼の頬に涙が伝っていることを示した。それは、ギルドからの依頼をようやく終えた際には感じなかった何かが、ソウルランクが上がったことでとめどなく溢れだした結果だった。

ようやく、冒険者として一回り成長出来た。感慨深さも一入で、

ものすごい満足感もあった。それと同時に、そこはかたない恐怖心も芽生えた。この先からは初級冒険者に与えられる加護はもうない。死ねば蘇生に失敗する可能性も出てくるし、人狩りに狙われ、持ち物を略奪される恐れも発生する。より一層気を引き締めて動かねば。

しかしながら、死を恐れているには冒険なんて出来ない。だからといって、生きる喜びを忘れては、冒険を通じて心身ともに成長をすることも出来ない。「メント・モリ。…いつか必ず死はやってくる。だからこそ、今ある生を大いに楽しむ」とはよく言ったものだ。ハルは奥歯をグツと噛みしめると、神の加護を信じ、冒険者としてより一層成長し、そして再びここへ戻ってくることを彼女に誓ったのだ。

ソウルランク2になるまで（後書き）

本気泣きはしませんでした。泣きかけはしました。本当に、感慨もひとしお。

とりあえず、次はのんびりとカオカ回ろうと思います。

この子がロストなんてしたら、私、本当に立ち直れないかも。だから、もし死んだら蘇生率100%で蘇生させる事を徹底しようと思います。

ちなみに、ダッシュ出来なかったのは左Shiftキーを押さなくてはいけないのを、間違つて右Shiftを押してたからようです。てへ。

小瀬その4 いいこと、ありました(前書き)

2011/11/28 心なしか良いことがありました。この前L
UK下がったのに。

小斬その4 いいこと、ありました

下水クリアのために奥へと進もうと意気込んだハルは、狂気の木こり男を倒した先で追剥ぎ男を倒した。ヤツの持ち物を物色すると、何やら道具を手に入れた。今まで、何かしらの道具を手に入れたことなどなかった彼は「何だろう、コレ。罨作成道具か何かかなあ？」と首を捻った。

そこから少し奥へと進んだところで、普段見掛けない虫を見かけた。ダンジョンの入口付近でも何度か見かけ倒してみようと追いかけたことがあったのだが、いつも退治する虫と比べると動きが早く、いまだ倒したことの無い虫だった。ここならそうそう逃げられないだろうし、倒してみよう。何かアイテムを頂戴することは出来るかな？と思いつき攻撃を仕掛けたのだが、やはりちょこまかと逃げられた。何とか追いかけながら倒してみると、何と、500ゴールドを手に入れることが出来た。

「何だよ、この虫…。追剥ぎ男なんて多くても15ゴールドくらいしか持ってねえのに。なんで人より金持ちなんだよ！」

普段一度に手にすることのない大金を得た嬉しさよりも、「人より金持ち」という事実になんとも悲しくなった。追剥ぎ男だっけって盗賊団の一員として、一生懸命働いているだろうに。そいつらよりも金持ちだなんて。でもまあ、かなりの臨時収入が入った気分だ。嬉しいことには変わらない。

一度街へと戻って先ほど入手した「道具」とやらを鑑定してもらったところ、何とそれは「アイテムポーチ」だった。冒険者用の鞆には四つまでこのポーチを取り付けることが出来る。ポーチがついていればそれだけ持てる荷物の量が増えるので、あると大変助かるものなのだ。

姉貴分からお下がりをお二つ貰っていたので、これでポーチが三つになった。ギルドから依頼されている下水に潜む盗賊団の一掃を完了すれば、褒美の一つとしてアイテムポーチが貰えるそうなので、それも数に入れれば取り付けられる最大数のポーチを持っていることとなる。大変ありがたい。

今日は臨時収入も入ったし、ポーチも一つ入手した。良いこと尽くめだ。今度宿屋に泊ったら、女将さんに「ちゃんと良いこと、ありました」と報告しよう。そう思いながら姉貴分宛ての近況報告の手紙をしたためると、物理的に不可能なのではないかというような速度で返事が返ってきた。何か緊急の用でもあるのかと慌てて封を切り、中身を確認したハルはほっこりとした気分を心なしか削ぎ落された。

「アイテムポーチを敵から入手する確率はホントにホントに低くて、私だってまだ貰ってないのに！あんだ、この前、LUKが下がったって言ってたけど、LUKと引き換えに拾ったんじゃないの、それ？」

…言ってるよ、馬鹿角。これはね、頑張ってる俺に神様が与えてくれたご褒美なの。断じてLUKと引き換えに貰ったものじゃないの。そんなに悔しかったらお前も盗賊に転職して、敵からのアイテム入手率が上がるスキルでも身につければ？

数值なんて、ただの目安。本当に運がいいかどうかなんて、それは神のみぞ知ること。冒険なんて、本当にそんなものさ。ハルは手紙を荷物にしまい込むと、「今度会ったら、入手したポーチを振りかざしてリアルラックの良さを見せつけてやるう」と笑ったのだった。

小断その4 いいこと、ありました(後書き)

LUKと引き換えなんじゃん?...とは言われませんでした、普通に驚かれました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943y/>

冒険者かく語りき ~トレジャーハンター修行中~

2011年12月1日02時53分発行